

競技力向上について

スキー専門部 小松原高等学校 水落 淳

はじめに

スポーツとしての最初のスキー競技は、19 世紀後半ノルウェーのテレマーク地方で発生し、この地方の子供達は、スラロームやジャンプをして遊んでいて、今でもテレマークという地名は回転の名前に用いられており、スキージャンプ競技の着地の姿勢でも有名です。

オリンピックでのスキー競技には、アルペン、ジャンプ、クロスカントリー、ノルディック複合、フリースタイル、スノーボードの6競技があります。

私が記憶しているオリンピックは、第 11 回札幌冬季大会のジャンプで金銀銅の独占した日の丸飛行隊、第 16 回アルペールビル冬季大会でのノルディック複合団体の金メダル、第 18 回長野冬季大会ジャンプラージヒル団体の金メダルは記憶に新しいと思います。

スキー界の現状

①練習場所の確保

何といっても自然の中で行うスポーツであるので、まず雪が無いと大会自体ましてや練習さえ出来ないのが、それが海無し県ならぬ雪無し県、埼玉県の現状である。

冬のシーズンの日常、毎日雪上でのトレーニングや滑走ができるのは、やはり雪の降る地域で、その練習量の差がそのまま力の差になっているのも仕方がないのかなと感じています。

唯一、埼玉県で冬のシーズン（10 月～3 月中）に練習ができる狭山スキー場があるのが救いになりますが、競技スキーを行うには、一般客の人達に混じって練習バーンの確保や時間制限、学校からの移動もあり、実際には厳しいのが実情です。また、一時期のスキーブームの頃、千葉県船橋市にスキードーム SSAWS（1993 年 7 月から 2002 年 9 月）がありましたが 10 年で解体になりました。

②選手の確保・指導者の高齢化

現場の状況としては、埼玉県のスキー専門部の登録校は、現在県公立校 11 校、私立校 14 校の計 26 校で、ピーク時の 40 校より 14 校の減少であり、その頃の選手数は男女合わせて 450 名以上でしたが、今では 1 / 3 ほどになっています。

顧問の高齢化、どの専門部でも同じことがスキー専門部の中でも進んでおり、平均年齢は、48.6 歳です。この状態は、もう数年前から変わっておらず、新しく引率に来られる顧問も専門的にスキーを選手から始めた教員の少なさもあり、技術指導については難しく厳しい現状である。

③指導力の向上

スキー専門部としては、部員や顧問を対象に年 2 回、10 月にはスキーのルールについての机上講習会を行っており、2 月には雪上でのポールのセッティングや基本練習などを行っております。

また、県大会前に数校で練習ゲレンデを借りて、合同練習を行なうことで選手同士が競い合うことで、向上効果もあるので、より多くの学校が集まり参加しています。そして学校に関係なく、選手にアドバイスをすることもあります。

④練習について

スキー場での練習が不足な分、スキーに似せた練習用具の取り入れも他のスポーツには無い練習方法だと思えます。陸上トレーニングとしてのカービングローラー、ローラースキー、グラススキーやグレンデにスキー用人工芝、プラスチック製ブラシマットを敷きプラスノースキー、グラステンスキーなどがあります。その練習により雪上でのターンのきっかけなどの感覚を養います。

また、実際には、選手の中にはチルドレンの頃から、スキーショップやクラブチームに入り、その専属プロに指導を仰いでいる場合が多くあり、そのチルドレンらが埼玉のトップ選手層を占めているのも現状である。そうした選手達は冬のシーズンに入ると、すぐにスキー場に入り、大会直前まで練習をしているのも現実です。

⑤スキーを取り巻く環境

80年代後半にスキーブームは、「私をスキーに連れてって」がきっかけではないが、バブル景気にも乗ったこともあり、87年から93年に爆発的に増加した。

バブルの崩壊後は、スキー人口の伸び悩みやスノーボードの出現もあり、スキー人口はピーク時の60%以上も減少、それに伴いスキーメーカー、スキー専門店などの市場の減少、そしてスキー場の閉鎖などもあり、スキーを取り巻く環境は厳しい状況におかれています。

まとめ

近年、スキー競技としては、温暖化の影響もあり年々雪不足が囁かれていることもあり、上述にも記載してありますがスキー場の減少・縮小もあり、より厳しい環境下にあると思えます。

また、経済状況の影響もあり、スキーを始めるのに投資額が大きいこともあり、若者のレジャーとしてのスキー離れが根底にあるのかも知れません。